第3種郵便物認可

子どもが主役の公立校作ろうよ

藤沢の市民団体初シンポ

不登校、いじめ、学級崩壊、校内暴力……。教育現場の様々な課題が指摘されるなか、現役の先生や保護者らが一体となって、新しいタイプの公立学校を作ろうと呼びかけている藤沢市の市民団体が十六日、「学校を創ろう」と題するシンポジウムを開いた。米国で始まった公教育の改革を取り入れようという国内で初めての活動。会場の藤沢市労働会館には約三百人が集い、新しい教育の場を生み出す方法などについて、活発な意見が交わされた。

主催したのは一九九七年十月にできた「湘南に新しい公立学校を創り出す会」。文部省の学習指導要領から離れて、子どもと先生と保護者が相談しながら、その子に合った学習を組み立てられる公教育の場を作ろうと、発足。月一回の定例会や署名活動などを通じて、新しい公立学校の理念を考えたり、行政に働きかけたりしている。会員は教育関係者や保護者ら地域住民約百人。

「どうすれば、新しい公教育の場をつくれるのか」。全国から参加した約300人は、パネリストのやりとりを熱心に聴き入った＝16日午後3時ごろ、藤沢市の市労働会館で

画一性排し 先生・保護者一体で

米のチャーター制度を参考に

十六日のシンポジウムでは、パネリストに「創り出す会」会長で小学校教員の佐々木洋平さん(三六)と、米国の新しい公立学校のスタイルを紹介する本を書いた教育情報センター代表の大沼安史さん(五〇)が登場した。

大沼さんによると、九一年のミネソタ州を第一号に、これまで三十六州が「チャータースクール法」を制定。親や教員たちが独自の教育構想を描き、州政府との間で契約が成り立てば、公立学校の自主運営が認められる。教育費の大半は税金でまかなわれるが、一定の成果が上がらない場合は閉校となる仕組み。現在、全米で約千四百校が認可されているという。

佐々木さんは十五年間の小学校教員生活で感じた疑問点を告白した。佐々木さんは同僚の先生たちと、クラスが学級崩壊したのを機に、クラスの枠をなくし、高学年の算数の授業で習熟度別のグループ編成を導入。ケーキを使って分数の考え方を教える授業や子どもたち自身に学びたいテーマを選ばせる授業に取り組んできた。

「主人公は子どもなのに、実は教師中心。世の中の動きと食い違った指導が繰り返されている。新しい学校では、子どもたちが社会に出た時にやりたいことをつかむ力を養いたい」と語った。

さらに、チャータースクール制度を参考にして描く学校像を明らかにした。数年以内の小学校開校を目指すこと、定員は百人程度、学区は市内全域、十人前後の教員以外は様々な職業の非常勤講師を配置することなどを紹介した。

チャータースクールについては、「創り出す会」の活動に刺激され、文部省や自民党、民主党などが研究を始めている。